緑色閃光（６）聖絶。

スプレアがニウテラへの進軍に必要な兵の募集をかけてから一か月が経過した。
前線基地となったウマポウンチ周辺は雨が降っていた。７月も後半に入り、雨季もピークを越えた。キャンプが展開し、ターミナルは雇兵や兵站の補給受付所となっているが、雨脚が強く物資の搬送や施設の設立に関わる人員を除いて人はいない。周辺はフローターが集まっており、マイスが並んで置いてある。
マイスがフローターの元に向かい、到着した物資を運び出している。雨が続いて外で整備が出来ないので、調整を兼ねて作業を手伝っている。機械は一定の間隔で動かさないと故障するからだ。
ハンスもラギメトルに乗り、物資の搬送を手伝っていた。上部が空いているフローターに腕を入れ、内部のコンテナを取り出す。兵士の誘導の元、所定の場所に置くだけの作業だ。
兵士は一通り運び終え、旗を振って指示を出した。
ラギメトルは旋回し、別のフローターへと向かい同じ作業を手伝った。
フローターに積んである荷物の搬送が一通り終わった。ラギメトルはマイスの置場に向かい、片膝を付いた状態でかがんだ。腰の背部が展開し、操縦席が突き出た。ハンスは雨を気にせずに降りた。冷たい雨と空気が体温を奪う。寒さに身震いがした。操縦席がマイスの内部に格納した。
傘を持ったルシエラに開いた傘を渡した。「お疲れ様、雨なのに大変ね」
「気にするな」ハンスは空を見上げた。「明日になると止むと聞いたが雨季に、しかも真冬に仕事を始めるとはな。おかげでろくに訓練も出来ない」
「通り過ぎるのを待てば１０月になるわ。元々雨が多い場所だから、仕方ないわよ」
ハンスは傘を受け取った。アランの姿はまだ見ていない。ニウテラが絡むとなれば来ると予測していたが、当てが外れたか。
フローターの置き場に次々とフローターが入り込んでくる。依頼を受け、ターミナルでの審査を通った雇兵達だ。フローターの１つにアランのフローターが見えた。
ハンスは僅かな笑みを浮かべた。
フローターは次々と着陸する。本来ならフローターの上部が展開し、マイスと荷物を運び出す手はずとなっている。現在は雨が降っているために上部を開くのはかなわず、やむなく閉じたままクァンター達が降りていく。兵士達は降りたクァンター達を囲み、テントへと運んで尋問に入る。
フローターから降りたアランも例外ではない。
ハンスはタラップから降りていくアランの姿を確認し、駆け出した。
ルシエラはハンスの突然の行動に驚き、後に続いた。
アランがタラップを降りた時、兵士達が取り囲んだ。
「依頼を受けたクァンターですね」兵士の一人が声をかけた。
「俺って人気者かよ、サインは後で受け付けるぞ」アランはカードを取り出し、兵士に渡した。
兵士はカードを受け取り、読み取り機にかけた。ターミナルでの検査結果とパスの署名が浮かび上がる。一語一句を確認した。ミリガンの署名が最後に書き込んである。一瞬顔が強張った。名だたるクァンターなだけに、直に紹介を受けた身だと分かり内心で驚いた。ウィンドウを閉じて片手を出した。「ようこそ、簡単な説明がありますので来て下さい」
アランは兵士と握手をした。「マイスを下ろすのは明日でいいか」
「今は雨ですから、仕方ありません」
ハンスは兵士達の元に駆け寄ってきた。「アラン」兵士達をかき分けてアランの元に向かおうとした。
「何をするんですか」兵士達はハンスを押さえ込み、かき分けて入ろうとするのを止めた。
「やめろ、友人だ」アランは兵士達をなだめて手を離した。「話をしたらすぐ行く。少しのワガママくらい受け入れてくれ」兵士達はハンスを離した。
ハンスはアランの元に来た。「来たのか」
アランは二人の方を向いた。「ハンス、お前は依頼を受けたのか」
ルシエラがハンスの隣に来た。兵士達は止めなかった。
「アリス議員が待ってるようにと言っててな。怪しんだが待ってたニウテラ進軍の依頼が舞い込んできたって訳だ」
アランは一瞬、顔をしかめた。ヴァンプの言葉に偽りはない。複合体が関わっているのは確かだ。
ルシエラはアランが乗っていたグルパスを見回した。「まだ乗り換えないの。限界が近いんじゃないかしら」
「動くんだから大丈夫だろ。整備もしてるし問題ねえ」
「整備って、ちゃんとした人に任せてるの」
「自分で出来るんだから問題ねえよ。人に任せると金がかかって仕方ねえ」
ルシエラはため息をついた。仕事の相棒であるマイスの整備をプロに任せないとは、ケチにもほどがある。整備不良で命を落としたら笑いものにもならない。
アランは兵士の方を向いた。
兵士達はアランの前に出てキャンプ内の建物に向かった。アランは後をついていった。地面の泥が粘りを持って歩きにくい。
複合体のキャンプは街から外れた場所にあり、急造の建物が並んでいる。ターミナルを前線のキャンプにすればいいのだが、民間との物資のやり取りがあるので実際には不可能だ。やむなく街の元にある空き地を使っている。
アランと兵士達は傘を畳み、建物の中に入った。
建物の中は簡素で、データの集積すると同時に他の兵士へ伝達するための機械類がところ狭しと置いてあり、奥で兵士達が作業をしている。中央に椅子とテーブルが置いてあり、床は泥にまみれている。中央にある机に男が座っている。
「アラン＝グレイザルをお連れしました」兵士達は男に伝達した。

　アランは反応に困った。
「初めましてだな、落ち着いて話を聞いてくれ」男は声を上げ、机を軽く突いた。机に映像が現れた。スプレアの紋が現れ、次に作戦の指示内容と地図が映った。現在地のウマポウンチからニウテラまで映っている。映像は輸送機のアイコンがウマポウンチから動き出し、ニウテラの前で停止した。「作戦の内容だが、大まかに言えば雇兵用の輸送機を使いニウテラから２０キロ圏内まで近づき、以後はマイスを降下し、状況を見ながら進軍する」
「場所の下ごしらえと補給は」
　映像が切り替わり、地図上に降下地点と待機場所、進軍ルートが映った。街道沿いの木々の薄い場所を降下地点とし、ニウテラの前に向かって街道沿いに進軍するルートを取っている。
「まず場所だが、無人機による偵察では的確なポイントがある。だが相手も分かっている以上、先手を取って確保している可能性がある」
「無人機で調べたんだろ」
「伏兵も否めない。確実に場所を確保するため斥候が必要になる」
「補給と撤退は」
「輸送機を経由する」
　アランは映像に目をやった。輸送機のアイコンの周辺にマイスのアイコンがある。
「マイスを輸送機から出して作戦行動を行い、終了次第後詰めの部隊を別の輸送機から出す。先に行動していた部隊は空いた輸送機に入り撤退する。いつもの手段だ」
　アランはうなづいた。先行部隊は消耗が激しく、雇兵は個々のマイスが異なるために前線での補給は満足に出来ない。一旦撤退して元に戻してから合流するのが基本だ。「一度に大量に用意できないか。徴集したマイスは何機ある」
「今の段階では１５０機程度だ。時期からして最後は２００から３００機程度の部隊になると見ている。うち前線に出るのが１００機だ」
　アランは輸送機のアイコンに触れた。輸送機の映像とスペックが映る。マイスを１０機程輸送できる。実際には１機は動力として接続するので揚陸可能なマイスは実質９機となる。アイコンの数は６機なので理論として５４機を一度に運べる。小隊なら１０以上になるので十分な戦力だが、ニウテラの部隊数が不明なので、出来る限り多い機体数で一度に囲い込む必要がある。攻める側は最低、守る側の４倍の戦力が必要となるのがセオリーだ。ニウテラのマイスの数が不明だが、高が１０小隊未満で守備に入るとは思えない。となれば余りに数が少なすぎる。「高が４、５０機で対処ができるか不安だ。戦力の逐一導入は愚策なのは戦いに赴く人間であればよく理解している。「用意出来る最大の輸送機は」
「１０機だ。ウマポウンチにある民間の輸送機を使わせてもらう」
　アランは鼻で笑った。民間がマイスを大量輸送する輸送機など持ち合わせていない。せいぜいがベンデルクトーク隊が家として所有する程度だ。でなければクァンター自身がフローターでマイスを運ばない。複合体の所有でバックアップを行っているのが明らかだ。「俺が入る部隊は」
　男は奥にいる兵士に目をやった。兵士は奥へと駆けていった。
「お前ほどの実力のある人間を指揮下におくとなれば、見合うだけの実績のあるクァンターになる」
　兵士と共に、６０代に近いクァンターが男の元に来た。顔は痩せこけているが、顎から生える白いひげが輪郭をごまかしている。伸び盛りのひげの割に栗色が混じった白の短髪が、無駄を嫌う人間性を示している。
「オスカー」アランは声を上げた。
　クァンターはアランを見て笑みを浮かべ、近づいた。「黒髪が来たと聞いて、まさかと疑っていたがセドリックの所の坊やだったとはな。年を食ったな」
　アランはうつむいた。「セドリックから離れたよ」
「親と子は離れていても変わらん」オスカーはアランの肩をたたき、手を差し出した。「確定ではないが、俺の指揮下に入る以外に選択はないと見ている。他に使える者がいないと泣きついてきやがったんだ。随分やんちゃをしてきたな」
　アランはオスカーと握手をした。「強かな優等生で通っているんだがな」
「俺もお前も、クァンターになった時点で一生悪ガキのままだ」オスカーは手を離した。
「オスカー、話があるがいいか」
　オスカーはアランに手を振った。「実は俺も来たばかりでな、ジェイロンで拾った若い奴を手ほどきをする必要がある」
「何故、部屋に来た」
「うわさを確かめに来たと言ったろ。明日の朝、雨がやんでいたら打ち合わせよう。マイスの置き場で待っている」端末とカードを取り出し、重ねて打ち込んだ。打ち込みを終えると、アランにカードを差し出した。
　アランはカードを受け取った。
「作戦は聞いたか」
「さっきな。進軍をについて、お偉い皆さんの判断が気になるが」アランは男の方を向いた。
「表向きには交渉をすると言っているがな」男は力を抜いた。「今から話すのはオフレコだ。上の思惑としては雇兵が勝手に行ったとみなし、責任をなすりつけて逃げ切る気だ。兵站を我々が行うのも、当初は自分達の指示だとアピールする狙いがある」
　アランはため息を付いた。指示を無視して交戦に入ったとストーリーを作れば国民や議会の追求から逃げ切るのは容易になる。シナリオを作るための俳優として自分達を雇い入れたのだ。かと言って憤慨する気はない。交戦をしたとして表向き解雇しても、前金で元が取れるようになっている。最初から解雇を前提として雇用しているのだ。
「スプレアはニウテラを奪う気か」オスカーは男に尋ねた。
「複合体がケツに付いてる。何よりお前らは契約以上の仕事はしない。奪うとなれば君達に任を伝え再契約の必要があろう、金の交渉はするが、前線で契約更改をするなど聞いた試しがない」

オスカーは笑った。「安心したよ、余計な仕事を増やさずに済む」
「お前の所属と仕事の詳細は、近々仮設の司令室でブリーフィングで説明する。回線は常に開いておけ」
「今いる場所と違うのか」
「規模が違いすぎる」
「了解した、回路は開けておく」アランは端末とカードを取り出し、重ねてカードにデータを移した。男にカードを差し出した。「プライベートを覗き見するなよ」
男はカードを受け取った。「
アランは部屋を出ていった。
兵士達はアランの姿を見て眉をひそめた。態度の横柄さに嫌な印象を持った。
男は兵士達の表情を見た。嫌そうな表情をしている。「クァンターが真面目で良い人だと予想してたか。安心していい、仕事はやる連中だ」アランのカードを机の上に置いた。アランの身分と共に、回線がつながっている旨のデータが映っている。アランの状況を確認している。
オスカーは男に近づいた。「坊やの面倒を見ないといけないんで、俺も出る。アランが来たのを知らせてくれて感謝するよ」部屋を出ていた。
男はアランの状況を確認すると腕を振って机を拭く動きをした。表示が消えた。
アランは建物の出入り口で傘を開き、出ていった。雨は止まず、兵士達はマイスやクァンターへの物資の搬送を行っている。クァンターは前線で汚れ役として働いてもらう客だ。自分のフローターへと足を運んだ。
「アラン、待ってたんだ」ハンスがアランの前に来た。
アランは足を止めた。「バイトでもあるのか」
「依頼の報告をしに来たんだ、フローターで話そう」
アランの頭の中から、ニウテラで行った依頼を思い出した。ニモ＝モントジュニアスにてヴァンプと会った時にデータを見た。解析出来ているのを確認した。何も問題はないが念の為、本人の口から経緯を確認する必要がある。「場所は」
「案内する、ルシエラが飯を作っている頃だ」ハンスは自分のフローターに向かった。アランはハンスの後をついていった。
ハンスはマイスが置いてある場所に来た。ナルゲムを中心とした雇兵のマイスが皆、膝を付いた状態で置いてある。
ハンスはラギメトルの前で立ち止まった。アランも立ち止まった。黒みがかった紫のフローラルデバイスを持つマイスは、大型な上に目立つ色なので否応なしに目に付く。背部にアランのグルパスと同じユニットが付いている。
「実物を見るのは初めてだろ」
「複合ユニットは使いこなせるのか」
ハンスは眉をひそめた。「武装は多い方がいいからな、もしもを想定して付けた」
「使わない武装はデッドウェイトになるだけだぞ。重心が偏ったら終わりだ、普段使い慣れた装備で十分だ、なければ撤退すればいい。生き延びるのは名誉だ」アランはラギメトルの背部に周った。背部の補助腕には小型剣を内蔵したスピアを２つ背中に抱える形で装備している。脇には対人、対物用の機関砲を１門を搭載している。腰には発煙筒発射装置が側面に３門づつ左右で６門を付けている。
「死んでも恩賞なんて出ないからな」ハンスは笑い、アランの方を向いた。「ユニットを使いこなすコツはあるか」
「バランスをつかむのに調整場で半年訓練した。次に座学に忍耐だ。最後に応用だな」
アランの言葉にハンスは気難しい表情をした。アラン程の人間と言えど、一つの武装を使いこなすのに相当な時間がかかる。受領してから２週間もない自分には到底無理だ。「一ヶ月では」
「プログラムは入れてるんだろ、なら１週間もあれば十分だ」
「けど、お前は」
「試作品のままだ。だから全部マニュアルで動かすしかなかった。外が同じでも改良して動かしやすくなっているはずだ。でなければ人を選ぶ兵器になる。誰も使えない兵器なんざ、転がってる石より価値がねえ」
「なるほどな」ハンスはマイスに背を向け、フローターに向けて歩き出した。
アランは後に続いた。
ハンスは自分のフローターの前に来た。鋭利な輪郭を持ち、金属光沢を含んだ黄色みがかった色が木製の船に見える。上部はマイスや物資を取り出す関係でドーム状になっているのは他のフローターとも共通している。
アランはフローターを眺めた。「新調したフローターか、住みにくそうだ」
「ルシエラと同じ意見だな。実は快適なんだぜ」ハンスは端末を取り出し、操作した。フローターの脇から折りたたみ式のタラップが展開した。ハンスはタラップを上がり、入り口に来た。アランは後に続いた。※
入り口のドアが開いた。ハンスは傘を折り畳み、中に入った。
アランも中に入った。
玄関で泥を払い、廊下を通って階下の居住エリアに入った。白を基調としていて、化学物質の匂いが僅かに漂う。まだ人の匂いが染み付いていない。
ダイニングに着いた。ルシエラがキッチンで調理をしている。鍋と窯がコンロの上に置いてある。
ルシエラはあらンに気付いた。「来たんだ」
「席に付けよ」ハンスはテーブルに向かい、座った。
アランはハンスと向かい合う方に座った。
ハンスはテーブルを突いた。メニュー画面が浮かび上がった。「早速だが、
ニウテラでもらったマイスの腕だが無事に解析が済んだ」メニュー画面を操作し、マイスの解析結果が映る。複合体の署名が付いている。

「知っている。でなけりゃデータが出てこない」
　ハンスはうなづいた。「データはクァンター内で共有する命が出てる。ニウテラに進軍する時に現れる可能性があるからな。データによるとグルパスに近い設計だと出てる。心当たりはないか」
　アランはデータの図面を見た。確かに輪郭や駆動系はグルパスに似ている。古い設計を保ちつつ、細かい部品を規格品に収めているグルパスと異なり、映っているマイスは発展して効率を上げた印象がある。機体の推測データ等もグルパスに似ているがカラーが違う。
「グルパスはあまりにも古くて既に生産してない。お前が動かしているのを除いて目撃例なんざ、博物館か技術者の教科書位だ。近い機体なら、何か分かるんじゃないか」
「俺に押し付けるのかよ、大体俺だって分からねえんだ。知ってたら苦労はしねえって」
　アランの言葉にハンスは黙った。最初から分かっていれば、解析を依頼する理由はない。
　ルシエラはライスと共に、フェイジョアーダの乗った皿をハンスとアランの元に持ってきた。
　自分の分の皿も置き、ハンスの隣に座った。「アラン。ラギメトルが議員の認証が必要なの、何で教えなかったの」
「忘れてた」
　ルシエラはアランの簡素な返事に詰まった。
「普通なら議員が持ち込んだんだから、認証が必要なのは当然だ。忘れてたのは済まない」
　ルシエラはアランの言葉に苦笑いをした。
「状況が状況なだけに、仕方ないさ」ハンスはフェイジョアーダを食べ始めた。今まで通りの慣れた食感と味だ。
　アランはフェイジョアーダに手を付けず、机やウィンドウに触れてデータを観察している。報告書には複合体に登録しておらず、グリンゴかスプレア、ガルキアの各国家が独自に製造した機体と推測していると書いてある。スプレアはヴァンプの言葉が本当なら、複合体に無実を証明するためにニウテラへの進軍を行っている。グリンゴは古臭い武装による人海戦術と持久戦、もしくは鹵獲したマイスの使用がメインだ。独自製造するにしても、ツギハギなのが目に見えている。独自発展の開発力と、中立で駐留している部隊が少なかったとは言え、都市一つを壊滅できる程のマイスを製造できる技術があるかと言えば疑問が湧く。ガルキアが製造するにしてもグルパスは互換性のある部品の確保が難しい程に機構も古い。上位互換と言える程に発展するメリットは薄い。正式採用し、現在でも高性能なモカラを元に開発すれば十分すぎるのにだ。
「ちぐはぐだな。各勢力が作ったと言えば通じるし、いいえと言っても通じる。誰が何のために開発したんだ」
「中にいるクァンターに直接聞くしかねえよ」ハンスはフェイジョアーダを口に含んだまま返事をした。
「無人機だったら、聞き出せないな」
「無人機なんてありえねえよ。動かすのは意外に複雑だしな」
「だが、マイスにはありえない滑らかさだった」
「お前の動きだって滑らかだ。変な油使ってるんじゃねえかって位だ」
「相性がいいだけだ」アランは言い切った。マイスはクァンターの脳波と各部位の筋電位を読み取り、各々の部位にあるコンピュータに割り振って連携して適切な動きを取る仕組みになってる。動物で言えば昆虫の頭脳に近い。人間の反応をダイレクトに反映しているので処理の構造上、動きがぎこちないのは仕方ない。だが、リアラ＝グルパスは専用機とは言え人間に近い動きをする。機体の性能が極端でない限りアランとの相性が優れているか、自身がクァンターになるために生まれてきたと言っても過言ではない程の資質を持っているかだ。
　ルシエラはアランがフェイジョアーダに手を付けていないのに気付いた。アランは肉が混じった料理を好まないのを察した。「ごめん、食べないんだっけ」
　アランはスプーンを手に取った。「データに夢中になりすぎた。冷めるとまずくなる」フェイジョアーダとライスをすくって口に入れた。スパイスの濃い味が肉の不快な匂いをかき消している。
「ニウテラを潰してから目立った動きがないわ。制圧したガルキアも交戦したデータを公開していないのも不気味ね」ルシエラは不安げに言った。
「データは複合体を介してクァンターに共有する。となれば奴らが出てきても対処は可能だ」
「腕の差はカバーしきれない。基本は集団での囲い込みになるな」アランはフェイジョアーダを喉に流した。「進軍時に襲ってくるかも知れないか。ガルキアも敵とみなしている以上、共闘になるかも知れない」
「だといいんだけどな」ハンスは適当に相槌を打った。共闘となれば生き残る可能性が上がる。
　アラン達は黙り込んだ。雇兵は上の決定が優先だ、自分達が仮説を練っても意味はない。黙々と食事が進み、３名とも食べ終えた。ルシエラは席を立ち、アランとハンスの食器を手に取って重ねてキッチンに向かった。
「明日からは」
「訓練位しか作業がないな。演習程大規模には出来ないし、兵士側もクァンターが募集人員に達するまでは無人機を飛ばして情報収集位しか出来ない」
「下ろした後にすぐ入れるといいがな」
「お前なら問題ないさ」
「だといいんだが」アランは席を立った。「世話になった。解析の依頼を解決してくれて感謝する」
「明日から訓練に合流するのか」
「マイスが出せればな」
　アランは部屋を出ていった。

翌日の朝、雨は止んでいた。曇天の空の元、早朝から兵士達は雨で鈍っていた動きを開放して物資の搬入や整理、クァンターへの補給を開始した。
アランのフローターの上部が展開し、グルパスが内部から立ち上がった。フローラルデバイスからベージュの光を放ち、湯船を降りる動きでフローターから地面に足を付けた。周辺にいる兵士やクァンター達は、２５年前の最初期に稼働していたマイスの姿に見入っていた。人の動きに匹敵する滑らかさで、マイスを保管するエリアに歩いていく。
アランは操縦席で足に力を入れ、兵士やクァンターを避けながらグルパスを操縦している。「どけよ、ミンチになりたいか」声を上げ、グルパスをエリア内の空いている箇所に動かした。周辺のマイスは稼働を開始し、フローラルデバイスから光を放ちながら歩行して物資を溜め込んでいるエリアや何もない空白地に向かっていく。物資搬送の手伝いや調整を行うためだ。特に外の環境は調整状と異なっている上、フローラルデバイスは外気からエネルギーを取り込みエネルギーを生成するシステムを内包している。故に状況の変化に応じた調整は必須となっている。
アランも調整を行う必要があるのだが、単なる手続きとは言え検査と登録を受けなければ許可が降りない。クァンターと紐づけが出来ていなければ、所属しても裏切る可能性があるからだ。
グルパスは指定した位置で膝を付いて座った。フローラルデバイスの光が落ちた。腰の背部が展開し、操縦席が突き出た。アランが操縦席から降りてきた。整備兵達が集まってきた。
整備兵達はグルパスを目視し、フローラルデバイスの状況を確認していった。アランには端末からの情報を提供してもらい、照合して確認を取っていた。
アランは兵士にデータを提供し、カードを渡すとグルパスを調べている整備兵達に目をやった。電気式のはしごに乗っかり、胸部や頭部を調べている。「調べても何も出ないぞ」
「確認ですよ、肝心な時に動かないって言ったら洒落にならないでしょ」整備兵の一人が、アランの言葉に答えた。
「いつでも動けるようにメンテしてる」アランは整備兵に答えた。
暫く経った。整備兵達は検査を終え、持ち込んだ道具を持って引き上げていく。残った兵士は端末を経由して検査結果をカードに移し、アランに差し出した。「古い機体ですから、部品はほぼ期待できませんね」
「部品なら自前のがある。お前らが用意しても天引きで請求が来るんだから一緒だろ」
「確かに仰る通りですが、整備は素人が」
アランは整備兵を睨みつけた。「素人がって言ってる段階で素人なんだよ。自分は何でも出来る賢者気取りか。俺がやる
。古すぎてお前らでは整備できないだろ」
「規格があっていれば問題ないですよ。提供してもらったサービスマニュアルにも規格品について書いてありますから」
「マニュアルに書いてあるのと、実際にやるのとは違う。自分でできるんだから問題ねえ」
「下手をすれば整備班の仕事の取り上げになりますよ。規則として現地のバックアップを受けるようにと聞かなかったんですか。何なら憲兵隊にかけあっても」
「呼びたきゃ呼べよ、契約内容にも自分でやるって書いてあるぞ。条件が折り合わないんだったら、素直に言え。さっさと帰るからよ。仮に許可なく触れても、防御障壁が起動する細工をしている。別次元に吹っ飛びたくなければ、大人しく見るだけにしとけ」
整備兵はアランの態度にため息を付いた。子供の言い分だ。かと言って憲兵を呼んでも意味がない。アランにとってトラブルは想定内だ。言いくるめて終わりなのが目に見えている。「分かりました。代わりにトラブルがあっても一切関与しません」他の整備兵と共に去っていった。
「感謝するよ」アランは大声を上げた。整備兵は何も返さなかった。
アランは端末を操作し、フローラルデバイスの状態をアイドリングにした。周囲を見回した。端の方にベンデルクトークが並んで置いてある。隊として確保しているエリアだ。早速向かった。
ベンデルクトーク隊のエリアでは、兵士達が隊の人間と物資のやり取りをしている。オスカーはやり取りに参加せず、足場をかけて若い男にマイスの整備に関する指導をしている。
アランはオスカーの元に向かった。「オスカー、おはよう」
オスカーは作業を止め、アランの方を向いた。「アランか」
「昨日は話をし忘れたが、ジェイロンで高エネルギー体に遭遇したって話、本当か」
「ジェイロンか」オスカーは作業をしている若者の方を向いた。「少し席を外すぞ」
若者はオスカーの方を向いた。若者は凛々しい顔つきで肌が黒く、坊主頭をしている。目にはイヤホン付きのゴーグルをしている。翻訳機だ。耳や目で見た文字や会話を適切な言葉に変換し、ゴーグルに映し出し耳に伝達するシステムになっている。「時間は」たどたどしく声を発した。
オスカーは胸に下げている懐中時計を見た。「１０分もあれば戻る。先に交渉が終わったら呼んでくれ」
「分かりました」若者は丁寧な口調で言った。
アランは物資を入れておく木箱の前に来た。木箱の上には飲み物のパックと皿が乱雑に置いてあり、地面にはまだ手を付けていないパックがかごに入って置いてある。「ジェイロンで不可解な連中と交戦したと聞いている」
「報告書にまとめたよ。複合体が公表している内容が全部だ」オスカーはパックを手に取り、千切って開けて口を付けた。
アランは端末を取り出し、木箱の上に置いた。メニュー画面が浮かび上がった。アランは画面に触れ、複合体の報告書を出した。
「実を言うとルガージ＝セイロにも同じ高エネルギー体があったが、突如消滅して行方不明になった。行方が分からないとなればナルオンの存続に関わる」
オスカーはパックから口を離した。「別だと見ていい」
「分かるのか」
オスカーは首を振った。「ルガージ＝セイロの奴は直に見てはいないが、単機だと聞いている。だ

が交戦したのはちゃちなロボットだけとはいえ、隊を編成して調査していた。となれば別の奴だ。単純に一瞬だけ穴にハマったか知らんが、分かるのはグリンゴではないのは分かる。下手をすれば異世界の人間かもしれん」
　アランはオスカーの言葉に疑念を覚えた。「人間と言ったな、人が乗っていたのか」
　オスカーは顔をしかめた。「密にしとけ」若者の方を向いた。
　アランはオスカーの目線の先を見た。若者がマイスを調べている。「まさか」声を上げた。若者がロボットに乗っていたのか。
「複合体には素質のあるグリンゴを拾ったと言っている。保護した時は自白剤でも飲ませてやろうかとしたが、一人しか保護していない以上壊す訳にいかん。幸い翻訳機を使って通じているし、大人しくて正直な奴だ。時期がくれば自分から話し出す」
　アランはうなづいた。オスカーをはじめ、ベンデルクトーク隊は報告以上に知っているのは若者について位しかないのは分かった。
「奴らは複数いて、皆一瞬で姿を消した。調査していたロボットの隊を見捨てたんだ」
「転移先は」
「分からん。別の隊に連絡を取っても、マーカーを使っても駄目だ」
　アランは若者の方を向いた。手がかりを知るのは若者だけだ。かと言って尋問する気はない。今は背中を預けるクァンターだ、もめる気はない。「分かった」
「俺は飯を用意してくる。脅すんじゃねえぞ」オスカーはアランに警告し、フローターの置き場に向かっていった。アランが次に何をするか概ね予測が付いている。
　アランは若者が乗っている足場の元に来た。若者は工具を見ながらつぶやいている。翻訳機は言葉を認識していない。言った言葉がアランの耳に入ってきた。聞き覚えのある言語だ。
「おはよう」アランは試しに日本語で声をかけた。
　若者は驚いた。聞き慣れた日本語が聞こえ、アランの方を向いた。肌は黒いが髪は黒く彫りが浅い。日系人だと認識した。「日本の人ですか、生きてたんですね」
「何を言っているんだ、あいさつしたんだから返せって。お前は何者だ」
　若者は頭を下げた。「すみません。自分は園田、園田兼定と言います。東安部のケニア方面に駐留してました。貴方は」
　アランは兼定と名乗る若者を観察した。線の割に筋肉質で、普段から鍛えているのはすぐに分かる。肌は黒く自分とは異なる系統の人間だ。顔の輪郭からして自分より若い。兼定が日本語で何を言っているか分かるが、ケニアや東安部と言った固有名詞が理解できない。ナルオンにはケニアと言う地名はないし、どの勢力にも東安部なんて組織はない。混乱していると見えるが、とっさに放つ言葉は現地の言葉ではなく日本語だ。明らかに矛盾している。
「貴方は日本語を話すのですから日本人なんですよね、自分達より先に来たんですか。上の話では自分達が初めてとなっているのですが、公式記録にない計画でも。もしかして極秘の先遣艦隊の人ですか」
　アランは渋い表情をした。「矢継ぎ早に質問するな、俺は何も知らん。話が微妙に食い違ってるから流すぞ」
　アランは足場に足をかけ、兼定に近づいた。端末とカードを出し、カードを差し出した。「俺はアラン。アラン＝グレイザルだ。オスカーと同じ部隊の配属が内定してる。作戦行動中はお前と同僚になるって訳だ。フォルタジアスに行ったか」
　兼定はカードを受け取り、不思議そうに眺めた。「いえ、北方に来たのは初めてです」
　アランは兼定が失敗作として廃棄処分を受け、さまよっていた所で戦闘に出くわしてオスカーが保護したと推測した。クァンターとして日が浅く、フォルタジアスに行っていない以上、登録もしていないので端末も持っていないと見える。
「日本人の工作員なんですよね」
　アランは自分の頭を軽く突いた。「日本人ってのがなんだか分からねえが、日本語って特殊言語なら、同系統の合言葉としてインプットしたと判断しろ。お前も廃棄処分を受けた一体か」
「味方に放棄を受けたといえば、言う通りです」
　アランは眉をひそめた。話が微妙に通じていない。今のままでは本題の特異点について話をしても、理解出来ないまま進んでしまう。
　兼定はアランに不可解さを覚えた。日本語を流暢に話すが日本語を知らないと言う。かと言って周りの人間が全員日本語で話すかと言えば身分が異なっている。
「兼定と言ったか、クァンターの経験は」
「よそ者、いえグリンゴとの交戦が」兼定は気難しい表情をした。「無数に」
「なら十分だ」
　兼定は周辺を見回した。輸送車があれど戦車がない。「機甲部隊や歩兵はいないんですか」
　アランは、兼定が意味のわからない言葉を発したのに眉をひそめた。意図は理解できる。「マイス以外に兵器がないって意味か。マイスが出る以上、他の兵器に意味はない。ナルオン最強の兵器だから、他のカテゴリーを駆逐しちまってるんだ」
「最強なんですか」兼定はベンデルクトークのフローラルデバイスを軽くたたいた。キチン質なので音は何も出ない。
　アランはうなづいた。「最強だが無敵じゃねえよ」
　兼定は黙った。
　アランは端末を操作した。マイスのガイドと、グリンゴとの交戦マニュアルが浮かび上がった。
　兼定はマニュアルを見た。視点を読み取った箇所に翻訳がかかり、字幕としてゴーグルの上に日本語となって浮かび上がっていく。
「まずフローラルデバイスのシステム情、周囲の環境次第で出力が不安定になる。ついで居住空間でもない場所に人が乗ってる以上、持久戦はほぼ出来ない。もって数時間だ。防御障壁を起動すれば接触回線を除いて通信はほぼノイズ混じりになりデータリンクもろくにできなくなる。つまりは集団戦

がほぼ出来ない。更に言えば輸送中は無防備だ。出撃前にたたけば終わる。」
　兼定はアランの話を聞きながら、脳裏に高原地帯で起きたグリンゴとの戦闘を思い出した。戦力を分断し、不意を突く戦術を行ってきた。
「グリンゴと交戦した経験があるなら分かるだろ。最強だが無敵じゃない。だからグリンゴに敗れる可能性があるんだ」アランは兼定の様子を見てため息をついた。オスカーは何も説明していないのか。端末を操作し、ウィンドウを閉じた。
　兼定はアランの様子を見ていた。初めて知った人なのに、妙な親近感を覚えた。「すみません。端末を売ってる場所ってあるんですか」
　アランは端末を振った。「中古でいくらでも手に入るが、登録しないと只の文鎮だぞ。用があったら声をかけてくれ、いくらでも教えてやる」アランは足場を降りて去っていった。
　オスカーがアランが去っていた方向と逆方向から来た。フェイジョアーダを３皿乗せた盆を持っている。足場の上にアランがいないのに気付いた。「アランは」
「さっき戻りました」
　オスカーは盆に乗ったフェイジョアーダを見た。余ってしまった以上は誰かが余計に食べなければならない。
「自分が食べます、若いから大丈夫ですよ」兼定はオスカーの表情から察した。
「言ってくれるな」オスカーは木箱の上に置いた。
　アランはグルパスの前に向かい、端末を操作して解除してから搭乗した。各部位を動かして調べ、異常を確認していく。操縦席から降り、端末を操作して部品の発注を行った。周辺に整備兵の姿はない。

　アランの元にブリーフィングの知らせが来たのは３日後後だった。上層部が進軍について交渉を行い続けてきたためだ。開始までの間は水面下にて軽い訓練や調整、兵士たちの手伝いを行っていた。人間は何もしない時間ほど苦痛な状況はない。何かしらの作業をしていないと落ち着かないのだ。
　ブリーフィングルームには雇兵として登録したクァンターがひしめき合っていた。説明を行う上官が壇上に立ち、降りしきる雨で濁った景色が窓を通して見えている。アランや兼定の姿があった。
　壁のウィンドウにはニウテラ近辺の状況とが映っている。通信班が無人機を飛ばして調査した結果だ。
　上官はウィンドウを切り替えながら説明をしている。１００キロメートル圏内にある降下ポイントまで輸送機で選抜した部隊を運び、待機部隊を除いてニウテラまで２０キロの距離に進軍する。アランが来た時に聞いた内容とほぼ同じだった。アランは余りに長い内容に眠気を覚えた。一度聞いた内容を二度、三度も聞くのは飽きてくる。
　アランの隣にいる兼定がアランの裾を引っ張り、眠気から開放した。
　ウィンドウが切り替わり、第一陣のリストが出た。同時に地図とルートが映る。
「無人機での調査の結果、降下地点で展開するキャンプと、進軍起点及びルートと待機地点の目星が付いた。集団戦に長けたベンデルクトーク隊を中心に、ベテランのクァンターを抽出した。今回は進軍作戦の前段階として降下とニウテラ近辺への進軍ルートの確認と予行、及び偵察を行う」
「シミュレーションで解決できないのか」クァンターの一人が声を上げた。
　上官はうなづいた。「実際に行軍するのとは訳が違う。実際に近辺を知る者なら、コンピュータで導き出したルートに違和感があるはずだ」上官はアランの方を向いた。
「メイドに飯作ってもらってる引きこもりなんでな、外なんてろくに覚えてねえよ」アランは適当にこてた。
　クァンター達は笑いだした。
「要は一旦進軍ルートを辿り、帰還するだけで終わりだ。終了時は輸送機で回収し、データを徴収する手はずになっている」ニウテラ近辺を示す地図のうち、街道から離れた地域が映った。近辺区域は木々が生い茂っているが、所々に剥げている場所がある。「敵襲を確認した場合、無理をせず連絡し、待機班で追ってきたマイスで囲い込んで撃破しろ。撃破したマイスは回収する」
「出すマイスの数は」
「１０班だ。うち進軍の予行は３班で行い、残りは待機だ」
　クァンター達はざわついた。
「降下地点にマイスが待ち伏せしている可能性は」
「防御障壁の反応がない。ニウテラの防衛に戦力を固めていると見ていい。交戦はキャンプでは有りえんと見ているから、行軍時は気をつけろ」
　兼定は隣にいるアランの方を向いた。「行軍の予行と偵察ですか。戦闘を避けるのが前提ですね」日本語で声をかけた。アランを除き他のクァンターには意味不明な言語にしか聞こえない。
「偵察って言っても強行偵察だ。近所をうろついて出てきた蜂をたたきながら、規模と巣の位置を調べるのがメインだ。でなけりゃ精鋭を選びはしない」アランは日本語で返した。
「戦力がわからないのに、たった３班で戦闘をしろっていうんですか、まして敵地ですよ」
「逃げるうさぎを追うのはライオンでも苦労するもんだ」アランは。説明をしている上官の後ろにある地図とリストを見た。７０名程のリストがある。
「逃げながら戦闘するんですね」兼定はアランに尋ねた。
　アランはうなづいた。「きつい任務になるな」
　アランは壇上に移るスケジュールを見た。４時より出立し９時に３班が降下する。ポイントの安全が確認次第残りを搬送し３班を筆頭に進軍を行って偵察を行い１７時に帰還となっている。意外に短いが、ほぼ無補給で、かつ最終目的が強行偵察である以上は順当と言える。
　上官は説明を終え、咳払いをした。「作戦は２日後の明朝６：００より開始する。出撃準備を怠ら

ぬよう。詳細は端末に転送し、更新内容は随時伝える。尚、作戦名はセメンド＝セメンチェスとする。解散」
　上官の言葉でクァンター達は席を立ち、部屋から出て行った。アランは退室するクァンター達をかき分けて去っていく。
「土壌もないのに種まきなんてひどい作戦だな。焦土の上なら枯れちまう」アランはぼやいた。
　ハンスがアランに気づき、人をかき分けて近づいた。「アラン」
　アランはハンスの方を向いた。「お前もいたか、俺も３班の一人だ。しかも班長でな」
「部下は」
「ウマポウンチで知り合った奴で、実績も相当だから問題ない。欠点は俺自身、班長の経験がないって点だな」
「ないのに、何で班長になった」
「ニウテラに駐留していたからだよ。周辺を知っているからとさ。同じ境遇のお前が班長につかなかったのが不思議なくらいだ」
「性に合わないんだよ」
　ハンスは渋い表情をした。「俺も言っとけばよかった」
　アランは笑みを浮かべた。「気にすんなって。言ったろ、戦闘になったらさっさとあしらって逃げればいいって。金ももらって万々歳だ」
　ハンスはアランの隣にいる兼定に目をやった。「新入りか、厄介な仕事を請け負ったもんだな」
　兼定は何も答えない。返答に困っている。
「初めての任務で気負ってるんだ、声をかけると余計なプレッシャーで潰れるぞ」アランは兼定の肩を叩いた。
「はあ」兼定は曖昧に答えた。

　２日後の天候は雨だった。雨季の真っただ中にあっても数える程しかない豪雨で、輸送機の運行すらも危うい状態だった。予報で雨が降ると分かっていたため、前日をもって物資とマイスの搬送を完了し、作戦開始時刻には輸送機を飛ばすのみとなった。整地していない場所の進軍、偵察は厳しいが作戦を中断するわけに行かない。通常通りの実行となった。
　アラン達は内部に格納したマイスに搭乗し、起動した状態で待機した。輸送機は１機につきマイス１０機を格納する。うち１機をフローターと同じく、電力供給用として接続する仕組みだ。アランの班は指定したポイントに降下した後、ルートを予行し特定のポイントで偵察して撤退する運びになっている。実際にはポイント上にいる伏兵の排除で、後詰めの部隊がキャンプを展開するための下ごしらえをする任務となっている。
　アランは操縦席内で随時流れる情報と作戦を確認しながら、脇に置いてあるカードを取り出してスロットに差し込んだ。ニウテラに駐留するマイスの数は問題ではない。実際に現れる数が問題だ。僅か１班であしらえるかが重要になる。
　プログラムが作動し、カードを認識するウィンドウが開いた。同時にアランの鼓動が高まる。自分が使用してもいいのか。無意識に指が震える。
　通信が入り、コールのウィンドウが浮かび上がった。アランは驚き、通信を入れた。
『すみません、兼定です』
　プログラムが暴発したのではないのに気づき、安心した。「何だ、眠れないのか」
『暇なんですよ。何でもいいから話でもと。気になったのですが、何でクァンターになったんですか』
「お前は」
『自分は』少しの間沈黙した。電子音が操縦席に充満する。『他になかったんです。仲間は皆死んで、生き残って見つけるまでの間やむなく』
　アランは笑った。「クァンターってのは、他に手段がない落ちぶれた奴がなるんだ。でなきゃまっとうな生活をやってるよ」
『アランさんも、落ちぶれたんですか』
「利用価値があるからって、親の勝手で養子になったんだよ。引き取った親が滅茶苦茶厳しくてな」
『親が嫌で出て行ったんですか』
「１０年ちょい前か、自分の身上と言うか関連するデータを目にしてな。詳細は分からなかったが最初に言った通り、親は利用価値があるから自分を引き取ったのが分かったんだ。で、出て行ったんだ。典型的な反抗期だよ。だが自炊ができなくてな、ニウテラで金が尽きて死にそうになった」
『死ぬんですか』
「腹が減るってヤバイんだよ。本当にひもじくてさ。で、親のコネで市長の元を訪ねたんだ。ひどい話だよな。親が嫌で出て行ったのに、親のコネを頼るなんてよ」
『親元に戻ったんですか』
　アランは首を振り、プログラムを目で追って確認している。「戻らなかった。ニウテラの市民も市長も、未来がないのを教えてもらったんだ」
『未来がないって、何でですか』
「自分達は必ず理不尽な理由で死ぬと分かっていたんだ」
　兼定は返事をしなかった。ニウテラの今の状況を予見していたのか。
「でもな、皆充実してたんだ」
『余命宣告を受けると、妙に元気になる人がいますよね』
「似たもんだ。自分達に未来はないからこそ、別の誰かに未来を託したいと決めて頑張っていたんだ。話を聞いて自分が甘ったれていたと気付いた。今だけしか見てなかったってな。ニウテラの人々の未

来を継ぎたいって決めてクァンターになったんだ。市長が話を出したら真っ先にオスカーの同期でセドリックってのが名乗ってな。グランジヴェイジのベンデルクトーク隊に入ったんだ」
『今もベンデルクトーク隊にいるんですか』
　アランはわずかにうつむいた。「３、４年前に事故で死んだって知らせが来た。ヴァンターだから、出先で死ぬってのは当たり前だ。珍しくはないが少し辛かった」
『アランさんは今もベンデルクトーク隊にいるんですか』
「俺か、言ったろニウテラの人々の未来をつなぐって。だから独立したら即ニウテラに駐留したんだ。因みにグルパスは独立した時にセドリックからもらったんだ。奴の話だと記念品だって言ってたが、やっと処分ができるとも言ってたな」
『ニウテラですか、ガルキアが占領しているとなれば取り戻さないとですね』
「取り戻す、ね」アランはおうむ返しに言った。取り返すなど不可能だと確信しているが、声に出す気はない。他人の願望を崩す行為は、当人に絶望と目標の喪失を与えるからだ。時計を見た。７時４０分を示している。
『確認したか、降下するぞ』オスカーから通信が入った。
　輸送機のハッチが開いた。
　オスカーのベンデルクトークがハッチに向かった。青みがかった光がフローラルデバイスから放っている。正式名称はリオル＝ベンデルクトークと言い、通信系統を強化した専用機だ。
　アランは地図を確認した。ニウテラの上空に来ている。
「エアは出来るか」アランは兼定に尋ねた。
『空挺なら慣れてます』
　ベンデルクトークがハッチから飛び降りた。
　次いでグルパスがハッチに近づいた。真っ白な雲が眼下を遮っている。
　グルパスが降下した。次いで兼定のベンデルクトークが飛び降りた。白い雲を越えて落下していき、フローラルデバイスから放つ光が強まっていく。マイスはフローラルデバイスの防御障壁の次元転移により空間に固定した状態になる。空間内に一瞬だけ固定し、随時変動する方法で降下していく。空中内に固定するのも可能なので、空中戦もこなせる。
　マイスはポイントに向かい、木々の隙間を塗って着地した。泥が跳ねる。
　オスカーはレーダーを見て、自分の班のマイスが着地したのを確認した。「着いたか」
『無事だ、班長』
『大丈夫です』
　アランと兼定の返答が来た。
　グルパスは周辺を見回した。薄暗く木々が覆っている。
　オスカーは眼前に映る立体地図を確認し、反応をスキャンした。マイスの反応はない。
「伏兵は」
『いません』
『周囲に機械も人もいない。味方が降下しているがな』
　地響きが伝った。他のマイスが別のポイントに降下したのだ。
『オスカーの隊か、ハンスだ。班のマイスは無事に降下した。街道沿いを行ってポイントに入る』
「了解した、我々は森に沿って向かう」
『了解だ』
　遠くでマイスがぬかるんだ地面を歩く音がした。木々が生い茂っている関係で、動きに制限がかかっている。
　アランは操縦席を通して見える景色を見回した。雨が降っていて見通しが悪い。
『ルートを進むぞ』オスカーのベンデルクトークが森を進んでいく。兼定も後を続いていった。
「了解した」アランは返答をした。グルパスを先へ進める。
　降りしきる雨の森は、土壌が柔らかく足で踏む度に泥と水が染み出して沈めていく。防御障壁で保護しているため、汚れも沈みも防ぐが行軍の影響は否めない。足は思うように進まずルートも迂回が多くなっていく。
　アランは行軍ルートと実際のルートを比べていた。明らかに外れている。無人機では実際に進行した場合の影響はわからない。更に天候一つで大分変わる。
『伏兵はいないですね』兼定が通信を入れてきた。
「雨で休みじゃないのか」
『スキャンしても反応がないので、休みではなく本当にいないんですよ。無人機も地雷もないですから、進軍を考慮してないんですかね』
「両方あっても、マイスには無意味だがな」
　熱帯雨林を進み、開けた場所に出た。オスカーはマップを確認した。ポイントとは異なる場所だ。目を合わせてマーカーを打ち込む。予定にないがポイントとして待機が可能な場所だと認識した。
　開けた場所を進み、再び森に入り進んでいく。随時スキャンをかけている。防御障壁やフローラルデバイスのエネルギーの反応及びはない。人間に近い生命反応があるものの、現地に住んでいるサルでマイスに遭遇するなり逃げていく。
　アランは人もいない状況に違和感を覚えた。裏道を通るのはガルキア側も想定済みだが、配備どころかトラップすらも置いていない。グルパスは兼定のベンデルクトークの肩に手をかけた。「まるで来てくださいと言ってるみたいで不気味だ」
『本当に、防衛に特化しているのですね』
「連中、引きこもる気か」
　アラン達の班は木々を避けて低木や草を踏み潰し、熱帯雨林を抜けていく。動物達はマイスの行軍から避けていく。
　２時間ほど進み、森を抜けた。暗い森から出ても雨と雲で薄暗いので幻惑は受けなかった。開けた低木や草が茂る場所

に出た。先に超高層ビル群の輪郭が雨を通り抜けて見える。ニウテラの中央にある行政エリアのビルだ。
　オスカーは地図を確認した。ニウテラから３０キロメートルの地点だ。
　オスカーのベンデルクトークは動きを止めた。「偵察地点に入ったな」機体の各部位に搭載しているアンテナを展開した。入った情報を元に立体映像が展開する。上空にはフローターが３機程巡回している。哨戒部隊だ。フローターからマイスらしき物体が現れるのを確認した。
「マイスだ、来るぞ」
『撤退するか』
　オスカーは背部の状況を確認した。熱帯雨林に入れば戦闘には向かない代わり、楽にカモフラージュできる。
『一旦熱帯雨林に入る。様子を見るぞ』
「様子見てもフローラルデバイスで分かる」
「出力を抑えろ」オスカーのベンデルクトークはアンテナを畳み、背中に搭載しているバルーンを射出して熱帯雨林の中に転移した。
　グルパスは兼定のベンデルクトークに触れた。『何が起きてるんですか』
「敵が来てる。熱帯雨林に隠れるんだ」
　グルパスと兼定のベンデルクトークは熱帯雨林の中に転移した。
　２機のマイスが降下してきた。足跡に目をやっている。マイスがいた場所は凹んでいる。上空を飛んでいるバルーンに目をやった。白い気球の形状で、下に箱型の機械が付いていて、防御障壁に似たパルスを発している。補助腕を介して背中に取り付いているエネルギー弾のガトリングを展開し、発射してバルーンを破壊した。弾けて落ちた。ジャングルの中に銃口を向け、掃射した。エネルギーの弾丸がジャングルの中を通過し、動物達が逃げ出していく。
　弾丸はジャングルの中に隠れて様子を見ているベンデルクトーク隊に向かって飛んでいく。
　ベンデルクトーク隊は探知を防ぐため、隠れる際に周辺に飛ばしたバルーンと同じ程度に防御障壁を抑えている。出力が下がっている分、エネルギーの弾丸が当たれば致命傷と行かないがダメージは受ける。
　弾丸が隊のマイスに当たる。防御障壁で軽減しているとは言え、フローラルデバイスに穴が開いていく。
　掃射が止み、マイスがジャングルの中に入り転移を繰り返して進んでいく。
　ベンデルクトークはジャングルから歩を進めて下がっていく。転移を行うだけの出力を上げれば即探知を受ける。
　兼定は、レーダーを通してマイスが近づいてくるのに恐れを覚えた。耐えきれず、上方を向いた。
　兼定のベンデルクトークはジャングルから上昇し、出力を上げた。フローラルデバイスから放つ光が強まっていく。上空１００メートル前後まで上昇した。
　１機のマイスは一斉に兼定のベンデルクトークに気づいて上昇、追跡を行った。もう一気はジャングル内の捜索を続けた。
　グルパスはマイスを追跡するべく、フローラルデバイスの出力を上げて上昇した。マイスの輪郭が雨の中から鮮明になる。ガルキアが採用したマイスのモカラだ。グルパスは背部ユニットを脇に回し、展開して中に入っている電導刃の柄をつかんで抜いた。直後に転移を繰り返し、モカラに近づいていく。
　モカラはベンデルクトークに近づき、補助腕を使いスピアを手に持って突きを繰り出した。ベンデルクトークは横に転移してかわすも、モカラは追跡してベンデルクトークの脇をつかんだ。腕の打突装置を起動する。
　兼定は眼前に映るモカラの姿に動揺を見せず、各部位に搭載している武装を確認した。腕部分に信号弾を搭載しているのに気づいて腕に力を入れた。
　ベンデルクトークは腕を突き出して砲を展開し、カメラを閉じてから信号弾を発射した。信号弾はモカラの顔面に当たり、炸裂した。爆発音と共に強烈な光が発生する。モカラはベンデルクトークが間近にいるために精密さを優先したモードにカメラを切り替えている。敏感になっている最中、信号弾の急激な発光が眼前で発生したので幻惑が発生する。不意で腕を離してしまい、打突装置が直後に起動した。打突杭はベンデルクトークの腕の脇に当たり、ついでウェイトと衝撃を緩和するために分解し外れた。
　ベンデルクトークはモカラから離れた。胸部フローラルデバイスが破損し、バランスが崩れるも間もなく回復する。
　兼定はカメラを起動してダメージを確認した。腕の稼働と支障が出ている程度で、深刻なダメージはない。カメラを閉じていたために信号弾の光による幻惑はない。対するモカラは幻惑と打突装置の衝撃によって動きを止めているのを確認した。
　アランはカメラをフローラルデバイスのエネルギーを検知するセンサーに切り替えた。通常のカメラが照明弾で幻惑したためだ。一直線にモカラに向かい、電導刃の出力を上げ刃が白に染まる。間合いに入るやいなや、すれ違い様に胴抜きで切り払う。
　モカラの胴は電導刃によりきれいに切断した。機能とバランスを失い、２つの部品になった体は光を失いジャングルに落ちていく。
　グルパスはベンデルクトークに触れた。「損傷は」
『片腕が動きませんが、補助腕でカバーできますしバランスも支障有りません』
　兼定は憂鬱な気分になった。とっさの判断とは言え照明弾を撃った以上、敵に交戦を知らせたも同然だ。「すみません、照明弾を撃ってしまって」
『反省なら終わってから言え、生き残る為の手段が最善だ』
　グルパスは電導刃を背部ユニットに格納し、カメラが幻惑から回復したのを確認した。ジャングルへ転移を繰り返し降下していく。オスカーのベンデルクトークの救出に入る。
　兼定のベンデルクトークは、グルパスの後に続いた。フローラルデバイスの出力の違いからか、グ

ルパスに追いつくどころか離れていく。２５年前のマイスだと聞いていたが、疑わしくなってきた。
　一方でオスカーのベンデルクトークはジャングルの中を木々に引っかからないよう２、３メートル間隔で転移を繰り返しつつ下がっていく。対するモカラは転移を行い追跡をする。
　オスカーは追跡してくるモカラを見て、顔をしかめた。
　ベンデルクトークは開けた場所に出た。
　オスカーはセンサーを確認した。上空に２機のマイスが急激に近づいている。識別からして兼定とアランのマイスだ。
　モカラも開けた場所に出た。ベンデルクトークは立ち止まった。モカラはスピアを構えた。直後、上空からクロスボウが飛んできた。モカラの防御障壁を貫通し、胸部から腹部に突き刺さる。板バネに引っかかり、上半身の動きを止めた。
　モカラは引き下がり、転移して森に引き返そうとする。
　グルパスがジャングルの前に転移すると同時に着地し、ついでベンデルクトークが着地した。
　モカラは脇へ転移するも、まもなくオスカーのベンデルクトークが先に回り込みスピアを腹部に刺した。スピアはモカラを貫通した。フローラルデバイスの出力が落ち、光が弱まった。オスカーのベンデルクトークはモカラを仰向けに蹴り倒し、腰部に片足を乗せた。かかとに搭載している打突装置が作動する。金属とキチン質が砕け衝撃が混ざった音が響いた。モカラの操縦席ごと貫き、光が消えた。
　オスカーのベンデルクトークは足をどけ、倒れたモカラの前で膝を付いてフローラルデバイスの出力を落とした。光が弱まり、座り体中のアンテナを展開した。
「意外に早かったな」オスカーは視界に入っているグルパスとベンデルクトークを見つめた。ベンデルクトークは脇部分にダメージがあるのが分かる。
『すみませんでした』
「降りろ」
『はい』
　グルパスとベンデルクトークも膝を付いて座った。フローラルデバイスの光が弱まり、操縦席が展開する。アランと兼定が降りた。
　オスカーもベンデルクトークから降り、端末を操作して脚部を開いた。中には荷物入れを入れるスペースがあり、中から傘と内部をスキャンする機能の付いたカメラを取り出した。傘を開いた。
　アランもグルパスから傘を取り出して開いた。兼定は端末がないので降りた後に脚部の蓋を開けて操作し、開いて中身を出した。傘を取り出して開き、オスカー達の隣に来た。
「只の哨戒機だな、ろくに研修も受けてない新人を使うなんざ、人使いの酷さが伺える」アランはモカラの状況を観察した。胸部と腹部にクロスボウの矢が刺さっていて、板バネが損傷している。腰の部分は打突装置による穴が開いている。他の部分は概ね損傷はなく、スピア等も真新しく損傷は塗装のハゲもない。
　オスカーは双眼鏡を通して状況を確認した。生命反応はない。
「新人って分かるんですか」兼定はアランに尋ねた。
「数から不利と分かれば撤退するか、味方に応援を頼み有利な状況を作る。両方がなかった上、俺達が撤退したのを追いかけてきた。斥候が簡単に引いたなら、罠を疑ってかかり応援を呼ぶのが普通だ。無謀に出るのはろくに遭遇戦ができねえ新兵って訳だ」
　兼定はアランの言葉にうなづき、モカラを見た。
「報告は２、３行で片が付きそうだな」
「すめばいいんだがな。信号弾を撃ち込んだ以上、援軍が来る」
「すみません」兼定は申し訳なく声を上げた。
「１機はまだしも、２機も同時に消息を断ったとなれば怪しむのが普通だ。遭遇した時点で結果は決まってたんだ。いちいち気に病むな」
「はい、クァンターは捕虜に」
　オスカーは双眼鏡を兼定に渡した。
　兼定は双眼鏡を通してモカラを見た。モカラの内部には生命反応がない。
「正規兵のマイスなので回収する意味はない」
　オスカーは端末を操作し、レーダーを開いた。味方の班が駆けつけてきている。信号弾を見て異常を検知したのだ。「援軍が来るまでの時間か」
「フローターの主が生命反応をなくせば、自動で帰還する。あるいは定期通信が途絶えたかレーダーに反応するか。増援がニウテラから来るなら、１時間もかからない」
「大量に増援が来るとなれば、今の班では対処は無理だ。ポイントに撤退するしか無い」オスカーは端末を操作し、ポイントまでの地図を映した。
「増援が来るのは確かだが、気になるな。ひょっとして、ニウテラにいる戦力はたかが知れているんじゃないか」
　雨音に混じり、マイスの音が響いてきた。
「もう増援ですか」
　オスカーは地図に映っている状況から、現在向かってきているマイスが敵ではないのを察知した。
「別の班だ。信号弾を見て、確認しに来たと見える」
　開けた場所に、ラギメトルと２機のナルゲムが降下してきた。フローラルデバイスの出力が下がる。
　アランはラギメトルの方を向いた。「様子見に来たか」
『信号弾を確認した。何があった』
「哨戒兵のモカラ２機と交戦した。撃破したが相手も確認しているはずだ。１時間以内に増援が来る可能性が高い」
　ハンスは両脇にいるナルゲムを見た。ヒリポとマイケルの顔が映った。「降りて確認するか」
『寒い上に雨だ、降りる気はない』
『同じく』

「周辺の見回りを頼む」
『了解だ』
　２機のナルゲムはフローラルデバイスを起動し、熱帯雨林の中へ転移していった。
　ラギメトルの操縦席が開き、ハンスが降りてきた。ハンスは端末を操作し、脚部を展開して中に入っている傘を取って開いた。アランの元に近づいた。
「２機の割には１機しかないが」
「俺が空中で切った。熱帯雨林の中に落ちてるよ。中のクァンターはとっくに死んでる。生きてれば救難信号が出てるはずだ」
　ハンスはモカラに近づいた。「撤退か」
「俺としては、ニウテラに入って戦力を見極めた方がいいと判断している」
　アランの言葉に、オスカー達はかおをしかめた。ニウテラはガルキアが保護の名目で占拠している。強行偵察とは言え、相手の領域内に入るとは無謀にも程がある。
「哨戒に未熟な兵士を使うってのがな。戦力が足りていないか練度に問題があるか確認したいんだ」
「アラン」オスカーはアランの方を向いた。「お前はニウテラにいた以上、なんとしても戻りたいのは分かる。だが入れと命令を受けていない。素直にルートの確認をして確認を取るだけでいいんだ。誰も望まないボーナスなどいらん」
「練度が低いと分かれば、少しは戦力の割り振りに融通がきくと睨んだんだがな」アランは残念そうな表情をし、グルパスの足元に向かった。
「付き合うよ」ハンスは声を上げた。
　アランは足を止め、ハンスの方を向いた。
　オスカーは顔をしかめた。「違反だぞ」
「ニウテラは中立区域だ。ガルキアが保護しているが領地にしていない。となれば基地を作っていれば国際違反になる。がルキアだって追求を受ければ明け渡しざるを得なくなるから、領域内に基地を作っている可能性は低い。領地外に拠点を作っている可能性がある」
「偵察と何の関係がある」
「ルート上に基地があるかも知れないって奴だ。仮にあるとすれば、進軍する上で問題になる。場合によっては俺達自身で壊滅とまではいかないが、破壊工作を仕掛けて補給ルートを断ち切る必要がある。今いる班では到底無理だから、一旦持って帰るけどな」
「ニウテラ領内や近辺にキャンプがあるかないか、偵察をする必要があると」
　ハンスはうなづいた。「あるとするなら即データを持って帰り上層部に報告し、工作か政治判断を待つ。なければないで報告して進軍を行う。重要な偵察任務じゃないか」
　オスカーはうなった。ハンスの言葉に偽りはない。確かに申請なく中立の領域内に自分達の拠点を作れば、保護ではなく占拠となり建前が消え、国際問題になる。かと言ってマイスを運営するのに１機当たり数十名もの人員が必要となる。補給経路を常に確保するためには広大なキャンプが必要になる。兼定のベンデルクトークを見た。片方の脇部分が損傷している。「兼定、稼働に問題は」
「腕が重くなっているだけで、バランスは問題ないです」
「分かった。俺は兼定を連れてポイントまで向かう。交戦記録の報告をする必要がある」
「自分はまだ行けます」
「兼定」オスカーは兼定に強く言った。兼定はうなだれた。「僅かな損傷でも、戻れるうちは一旦戻って修理を受けるんだ」
「はい」
「となれば」オスカーはハンスの方を向いた。「アランはお前の指揮下に入る。いいな」
　ハンスはアランの方を向いた。「アラン、お前が班長になれ」
　アランは笑みを浮かべた。「言い出した人間が、責任を放棄するのか。無責任な人間の命令は受けないぞ」
　ハンスは苦笑いをした。「分かった。なら俺の指揮下に入り、ニウテラ領内に入って偵察をする。お前は遊撃要因として班に加えるから、独自の判断で偵察をしてくれ」
　アランはうなづいた。
　ハンスは端末を操作した。ヒリポとマイケルの通信回線をつなげた。「聞いたか、アランがうちの班に入る。増援が近々来るから、即離脱して別ルート経由でニウテラに入る」
『アランが入るのはいいが、ニウテラに入るって本気で言ってるのか』ヒリポはハンスに尋ねた。
　アランはハンスに近づき、端末をのぞき見た。ヒリポが不安そうに見ている。「ハンスの言葉通りなら領地内の交戦はありえない。まだ中立都市だから、戦闘をすれば問題になる。捕まって尋問は受けるかも知れないが、マイスを捕縛するのに骨が折れる。データを取ったら素直に離脱してデータを持って帰ればいい」
『懐かしいな、水力発電所以来か』
「うざい小競り合いもなくなったし、野菜運びで一生を過ごせると安心したんだがな」
　マイケルは笑った。
「オスカーの隊がポイントに撤退する。下がるならオスカーの方に合流してもいいぞ」
『いや、お前と一緒にいる方が安心だよ』
『同じく』
「決まったな、即出るぞ。ルートは増援を考慮して大回りで行く」ハンスは通信を切った。
「大丈夫ですか」兼定は不安そうにハンスに尋ねた。
「二人共ニウテラに駐留していたんだ、周辺なら俺達より知っている。データを渡した後、可能な限り後を追う」
「必要はない。少数の方が有利だ」ハンスはラギメトルに向かい、腕時計を見た。自分が来た時間より１５分経過している。「早く出よう」
　オスカーはうなづき、兼定の肩をたたいた。「行くぞ、付いてこい」
「はい」兼定はオスカーに双眼鏡を返した。

オスカーは双眼鏡を受け取るとベンデルクトークの足元に向かい、傘を畳んで足の道具入れに双眼鏡と共に入れた。操縦席に乗り、格納するとベンデルクトークが起動し、立ち上がった。
兼定やハンス達も道具をしまってマイスに搭乗した。起動して立ち上がった。２機のベンデルクトークは来た方角へ転移を繰り返し、去っていく。
ハンスは周辺のレーダーを確認し、２機のナルゲムがいる方へ熱帯雨林の隙間をぬって転移する。グルパスは後をついていった。
増援が来たのは班が離脱してから４０分後で、オスカーらの予想通りだった。６機のモカラが到着した。残骸となり泥がついたモカラを確認し、周辺を読み取った。既に他のマイスはなく、足跡も地面に突き刺さる雨粒と木々の影で変形していた。
ハンスの班は、街道から離れた副ルートのジャングルを通っていった。ニウテラはフローターを受け入れるターミナルを除き、出入りが禁止していた場所なので強固な壁を持っていたが現在は壊滅しているので障害物にもならない。アランとハンスは目の当たりにしているので、キャンプのないルートから入る計画となっている。
４機のマイスは防御障壁を泥と雨が付かない程度に抑え、引き締まった土の上を歩いて進んでいる。探知の危険があるからだ。
ジャングルを進んでいき、ニウテラの周辺区域に入った。地図上で丘の上で、区域を見渡すのに有利な場所に出た。
マイス達は立ち止まった。先に壊滅したニウテラの都市が見え、キャンプが周辺を取り囲む形である。上空を無数のフローターが飛び交っている。
アランはカメラをズームし、都市の状況と周辺のキャンプを捉えた。雨で詳細は見えないが、コンピュータ処理で解像度を上げているので、輪郭は見える。中枢ビル群の姿が見えるが都市区域は見えず、キャンプにはマイスが並んで置いてある。
『予想通り、周辺に展開しているか』
「ドーナツの輪だな。太さは２、３キロ程度だから突っ切れば余裕で街に入る」
『上を見ろよ』
「分かっている」アランは写真をズームし、フローターの形状を確認した。データベース内にあるフローターの輪郭と照合していき、一つのデータが現れる。ガルキアで採用しているフローターだ。となれば周回しているのはモカラのフローターだ。キャンプに雇兵はいないと見ていい。次にキャンプの方にカメラを向け、拡大した。雨なので人は余り出ていない。白いテントが区画化して置いてある。避難所にも見える。広場にはマイスが膝を付いて置いてあり、次々に運び込んでいる。マイスはモカラではなく、異なる形状をしている。マイスは解像度が低く、詳細に解析できない。データベースを呼び出して、判明している輪郭より機体を照合する。データの結果を見てアランは目を丸くした。ハンスが持ち込み解析した所属不明のマイスのデータだ。
「不明機ががルキアと一緒にいる。奴らは組んだと見える」
『鹵獲したんじゃないのか』
「鹵獲したなら色を変える、逆にガルキアの兵器を奴らが奪った可能性もある」
『あり得ない話だが、確かめる必要がある。手段は』
「小突く」アランは近辺を見回し、上空で手薄になっている場所を調べた。フローターが行き交っているが、マイスの姿はない。「モカラと一緒に編成してくれば、少なくとも敵対していないのは分かる」
アランは視界の隅にある立体地図に目を向けた。ニウテラ近辺を目で追う。内部のセンサーは目で追った部分を線で辿っていく。地図上に現在地から基地を真っ直ぐに通り、ニウテラの市街地を折り返してジャングルに向かうルートを書き込んだ。ハンス達に送信した。「突っ切っての上空偵察だ。フローターからマイスを出すのに時間を食うし、地上から飛ばすのにも時間がかかる。３、４キロなら出撃前に街に入るのは容易だ。後は離脱する」
『行きはいいが、帰りは交戦状態になる。集団リンチで鳥葬か電気椅子の挙げ句、故郷に帰ったのがドッグタグだけってのは勘弁願いたいね』ヒリポは嫌そうに声を上げた。
「俺だって故郷に帰りたいさ。街に入れば策はある。必ず戻る策がな」
『ジモティーが言うねぇ、とっておきのギミックでも隠して出ていったのかな』マイケルは笑いながら言った。
『アラン、あるのか』
「あるさ、俺が街のど真ん中に入ればいい。街に入ればお前の言葉通り交戦は不可能になる。突っ切るだけだ、向かってこない限り迷惑はかけない」
グルパスはジャングルから抜けた。フローラルデバイスの出力が上がり、一気に上空に向けて転移する。上空を転移しながらキャンプに向かっていく。
「いくら故郷だからって気負い過ぎって言うか、焦りすぎじゃねえの」マイケルはグルパスが入った方を見た。現職の雲と降りしきる雨しか見えない。
『奴はベテランだ、自信があるんだろう。だいたい強行偵察も任務のうちだしな』
隣に居るナルゲムもフローラルデバイスの出力を上げ、グルパスの後を追って上空へ転移した。
『仕方ないさ、予想してたんだ』
ラギメトルもナルゲムと同じく、上空に転移する。
「死にたくねえが、何もしないってのも性に合わねえしな。ボーナス弾んでくれるのを期待するぜ」マイケルは舌打ちをした。
マイケルのナルゲムも、先に出ていったマイス達の後を追った。
マイス達は上空を、転移しつつセンサーとコンピュータによる加工による映像で地上の状況を識別した。雨で視認による識別が難しくなっているためだ。フローターが行き交っている地上から３００メートル前後から、更に２００メートル上を飛んでいる。レーダーが雲の中に隠れているマイスを確認した。飛んでいるのはフローターだけではない。
『待ち伏せしてたか』

「想定内だ、突っ切れ」ハンスは声を上げた。
　雲から下にマイスが転送してくる。アランは背部のカメラから映るマイスを確認し、データベースから照合した映像を確認した。モカラではない、識別不明のマイスだ。
「組んでやがったか」アランは渋い表情をした。
　降りてきたマイスは２機で、転移しキャンプ上空を突っ切るアランのマイス達を追跡する。転移はナルゲムの比ではない速度の上、動きにぎこちなさはなく人がそのまま中に入っている動きをしている。
　まもなくマイスに追いついた。２機のナルゲムはもう振り切れないと判断し、転移を止めてマイスの方を向いて補助腕を動かした。つかんでいるスピアが脇に移動し、手につかむ。
　マイスは滑らかさで大型のスピアを構え、瞬時にナルゲムの１機の前に転移する。
　ヒリポは余りの速度に驚いた。
　マイスは突きを繰り出すも、直前で背部ユニットが割って入った。赤い宝玉状のユニットを中心に防御障壁が多重に発生し、スピアを弾く。
　マイスは一旦引き下がった。ラギメトルが下から現れた。突き出した背部ユニットを補助腕で振り回し、両脇に移動した。背部ユニットを剣の如く突き出して割り込ませたのだ。
　ラギメトルはヒリポのナルゲムに触れた。「早くアランの元に」
『若いの、お前は』
「足止めくらいしてやる。俺だってニウテラに駐留してたんだ」
『生きて抜けろよ』マイケルとハンスのナルゲム転移して去っていく。
　ラギメトルはマイスの方を向くなり、即座に雲の中に転移した。
　マイスは２機ともラギメトルを追跡する。雲の中は白く、機体の影しか見えない。フローラルデバイスから放つエネルギーを元にラギメトルを捕捉し、転移を繰り返して近づいていく。
　２機のマイスの反応を捉えた。互いに身構え、１機づつスピアで突き刺していく。
　直後に出力が上がり、２機の間にマイスの反応が現れる。スピアが伸び、１機のマイスの胸部を突き刺した。雲が薄まった。
　マイスは２つの背部ユニットから出ているエネルギーをとらえており、ラギメトルから翼のごとく展開していた。先端には幾重もの防御障壁を展開しており、スピアを受け止めている。ラギメトルはスピアを突き出した状態だ。２基の背部ユニットを開いた状態で防御障壁を展開し、本体の出力を抑える事でマイスの位置を誤認していたのだ。強い反応の中央に出力の小さいマイスがいたとしても、出力が大きい側に紛れてしまい確認できなくなる。攻撃が飛んでくるタイミングと場所さえわかれば、後は攻撃時の隙をついて１機を落とせばいい。
　突き刺したマイスの出力が落ち、防御障壁が消失してフロ
ーラルデバイスから光が消えた。
　ラギメトルは突き刺した１機を蹴り飛ばし、スピアを抜いた。マイスは落ちていき、しばらくして爆発した。空気の振動が走る。
　ハンスは驚いた。マイスが爆発するとは今までに経験がない。爆薬でも積んでいたのか、もしくは爆破する必要がある程の兵器なのか。
　残ったマイスは引き下がり間合いを確保する。
　ラギメトルは背部ユニットを側面に展開し、再び雲の中に入る。マイスは警戒し、間合いを取りながら様子を見ている。
　互いに時間が伸びれば有利な状況になる。ハンスの側はアラン達を市街区へ移動するための時間稼ぎが可能で、マイスの側からすれば応援を期待できる。
　ハンスは雲の中でレーダーを確認した。マイスは警戒して近寄ってこないのを確認し、転移を繰り返してグルパスの後を追った。市街区域に入るのが目的だ。戦闘が目的ではない。
　マイスはレーダーからラギメトルの反応が離れていくのを見て、逃げ出したのを確認した。追尾するべく雲の中に入る。
　ラギメトルはマイスが追跡しているのを確認した。また足止めをする必要がある。更に上昇した。
　マイスは白い雲に隠れているラギメトルを補足している。再びフローラルデバイスの反応が現れた。今度は３つだ。背部ユニットから発生しているエネルギーが２つに本体が１つだと分かる。直後に１つの出力が消えて２つになった。すぐに囮を意識して背部のバルカン砲を補助腕を使って前に出し、先に向けて牽制する。フローラルデバイスの出力が落ちているなら、防御障壁も落ちている。エネルギーの弾丸を本体が貫くはずだ。間もなく出力が下がっている１つの反応が落下していく。撃墜したと見えて雲から抜けて落ちた反応を追っていく。
　雲を抜けた時、マイスの視界に落ちた物体の正体が露わになる。切り離した弾丸で穴だらけになった背部ユニットの一つだ。出力が下がっているのが本体だと認識したのを逆手に取り、わざと１つの出力を下げて囮にしたのだ。マイスは上空を見た瞬間、起動した電導刃を片手に装備したラギメトルが背部に転移してきた。反応速度が早いとは言え、振りかぶった状態のラギメトルから逃れるには人間の反応速度以上の判断が必要だ。所詮人の反応を読み取るロボットでしか無い以上、人の反応速度を上回る行動は不可能だ。ラギメトルはマイスの胴を袈裟に切断した。マイスは腰部分まで切断し、２つに分かれた状態で落ちていった。
　ラギメトルはバランスを崩し傾いた。
　ハンスはバランスの状況を確認した。自動で持ち直すとはいえ、不安になる。アランはマニュアルで調整しているのかと頭の中で想像し、改めて天才だと認識した。「切り抜けたのはいいが」電導刃を見つめた。出力が下がり、エネルギーで包んでいた刀身がむき出しになっている。「さやを落としたから、持ちっぱなしになっちまうな」
　ラギメトルは雲の中へ転移し、アランの後を追っていく。
　けたたましい音が操縦席に響き渡る。直後にハンスの目の前に警告が現れる。ハンスは驚いた。
『Retirada imediata』と見出しが映っている。防御障壁を通して警告の通信が出るとなれば、よほどの事態だ。ガルキアが流しているのかと判断して内容を読む。高エネルギーによる街一帯を破壊する

との旨だ。アランが言っていた必ず戻る策だと感づいたが、ニウテラを破壊するのかと懐疑になった。
　２機のナルゲムがラギメトルの元に駆けつけてきた。肩に触れた。
『無事だったか。まず離れろ』
『逃げるんだ』
　ヒリポとマイケルの通信が入った。口調から焦り気味だ。
「何が起きてるんだ」
『俺だって分からねえよ。近くにいたら間違いなく死ぬ』
『話は後だ、できるだけ離れろ』
　ナルゲムは転移を繰り返し離脱していく。
　ハンスはけたたましい警告音が消えないのに苛立ち、少しでも軽くなるならと判断して離脱を決めた。
　ラギメトルもナルゲムの後を追い、ニウテラから離脱した。

　グルパスはニウテラ中央にある行政区域のビルと対峙していた。
　機体各部のフローラルデバイスが開き、内部にあるエネルギーの発射口が現れた。グルパスの周辺にエネルギーが集まっていく。密度が濃くなり、防御障壁と異なる、雨が歪む程の空間の歪みが発生した。
　アランは眼前に走るプログラムと範囲を確認していた。エネルギーの充填は１０％に押し止める。メンテナンスを前提としない使い捨ての兵器だ、街一帯を破壊できる程度に押し止めないと壊れてしまう。もう二度と補修も再製も出来ない兵器だ。大きく息を吸った。クァンターになる前から世話になった人々と活き活きとした街の光景が脳裏に浮かぶ。二度と目の当たりに出来ず、心の中に閉じ込めるだけの存在に変わり果てていくのを予想し、手が震えた。終わりは自分で選ぶとラッセルは言っていた。時が来ただけだと言い聞かせ、起動した。
　グルパスの全身に搭載したエネルギー発射口から、緑色の光が無数に飛び交っていく。光は曲線の軌跡を描いてニウテラに向けて飛んでいった。光が物体を貫通すると、貫通した部分の周辺が大きくぶれ、分解し光になって消滅していく。建物が溶けていき、維持が不可能になって崩落していく。光はニウテラの周辺にあるキャンプにまで飛んでいく。範囲内にある無数の生命に向けて飛んでいるのだ。光が人間の体を貫通した瞬間、大きくぶれて分解していく。細かくなった部位は緑の羽根となりすぐに空気に溶けていく。兵士達は逃げ惑っていたが、光から逃れるのは不可能だ。光が次々に兵士たちを貫通し、分解していく。
　グルパスの操縦席にストリームの影響と時空の歪みの状況が映っている。光の矢を飛ばした先に次元の穴が無数に発生しているのが見える。穴は一瞬で埋まって消えるも、別の場所で光が通過し穴が開く。ストリームに影響を及ぼす程のエネルギーを飛ばし、次元に歪みを起こしストリームに穴を開けているのだ。霊体と実体とを強制分離し、霊体を引き寄せる力を利用して実体を次元回廊に封じる仕組みになっている。最強の性能を持つマイスですら上回る、ナルオンにおける最強の兵器だ。各勢力が求めた成果物とは、リアラ＝グルパス自身だったのだ。
　アランはうつむき、次々と光の矢が飛んでいく様から目をそらしていた。最近まで住んでいた場所を、人を自らの手で壊していく。機密保持のため、理不尽に人々を殺す役目を自らが買って出た時点で分かっていた。街の人々も、自らの未来が無いのをわかった上で兵器開発に志願した。未来のために命を差し出したのだ。死を与えた行為に泣いている暇はない。街の人々がたどり付けない未来を託した以上、望んだ遺志を継がねばならないのだ。前を向き、状況を確認した。人間の生命反応が消えていた。周囲一帯を覆い尽くした緑色の閃光は消え、グルパスだけが光を放っていた。
　アランはモニターを通して周囲一帯のストリームが不安定化し、かつ人間の生命反応が消えたのを確認した。
　グルパスの周囲を包むエネルギーが消え、発射口を閉じて戦闘状態に戻った。防御障壁を展開し、雨を弾いている。フローラルデバイスの光は、廃墟となり静まり返ったニウテラを照らす太陽になっていた。
　アランは改めて状況を確認し、深呼吸をして手足を見た。小刻みに震えている。心の中で覚悟を決めていたのに、実際に結果を見ると辛く心を貫いた。出来上がった穴が水を抜き、心に渇きを与える。干上がる前に忘れよう、視界から消そうと意思が働き、上空を見た。雨が降りしきっている。目が潤むが泣きはしない。
　グルパスは転移を繰り返し、ニウテラから去っていった。
　冬が曲がり角を越えた雨の日、ニウテラは第二のルガージ＝セイロになった。